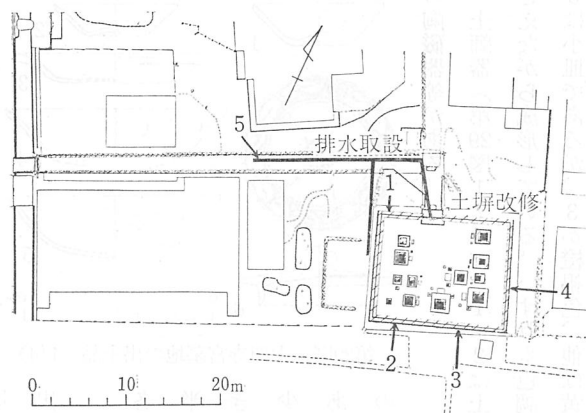


(松田和男・佐藤利秀)

昭和五十六年度大聖寺宮墓地土塀改修排水管理設工事箇所の調査

大聖寺宮墓地の土塀をブロック塀に改修し、あわせて排水溝取設工事を実施するに際して、昭和五十六年九月二十三日から十月十四日まで立会調査を行った。掘削溝のうち五箇所については土層の実測図を作成した(第27・28図)。

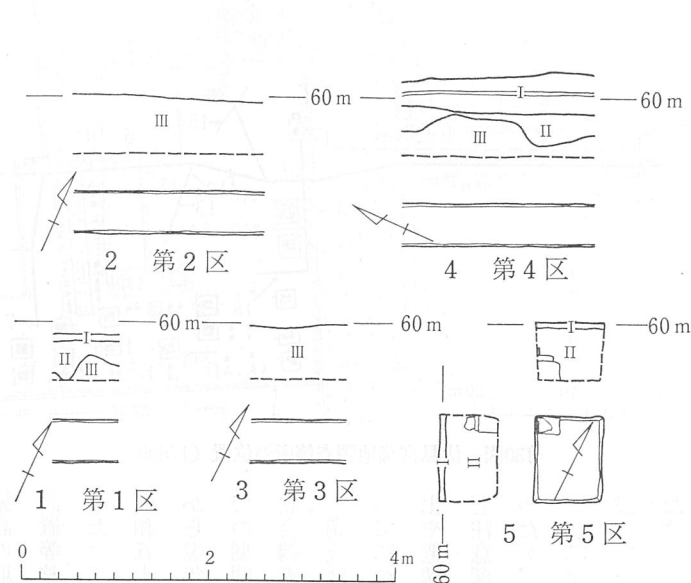


第27図 大聖寺宮墓地調査箇所の位置 (1/800)

掘削はおおむね幅〇・四〇・五メートル、深さ〇・六メートルであるが、第5実測区は排水溝の集水桝にあたるため、幅がやや広い。

標準的な層序は次の通りである。

I層 表土で、黒色ないし黄色を呈し、砂利や礫を含む。

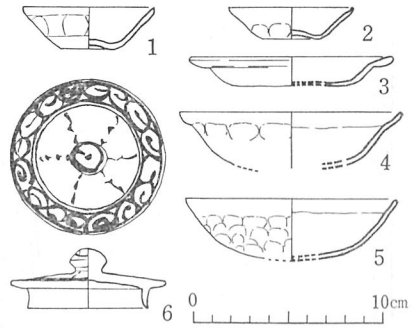


第28図 大聖寺宮墓地実測区平面および断面 (1/80)

II層 礫を含む黒褐色土層で、締めりは悪い。

III層 茶褐色土層で、II層同様礫を含むが、よく締まっている。

以上の各層は墓地の整地作業等に伴って形成されたものである。ところで、第5実測区の西北隅角部において、風化礫に取り囲まれた三段積の花崗岩切石が検出された。何らかの遺構の一部と思われるが、これ以上の掘削を控え、切石等をそのまま保存することとした。なお、



第29図 大聖寺宮墓地の出土品 (1/4)

の陶磁器等がある。

土師器 (第29図1~5)

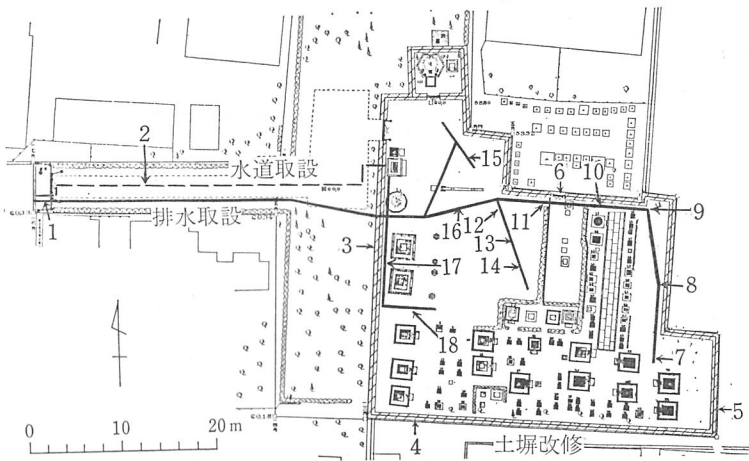
1・2は上げ底を呈する灯明皿で、指で押さえながら成形している。いずれも色調は黄白色で、器壁は薄い。3は小皿であるが、3が橙褐色、他は黄白色を呈する。4は外面の口縁直下に、5は外面の口縁部を除く全体に、それぞれ指押さえのあとが顕著に残っている。

陶器 (図版八、第29図6) 土瓶の蓋である。つまみを含む外面に、鉄釉を用いた文様が施されている。

(藤井良章・棟本 武・土生田純之)

切石及びその周囲から遺物は全く出土していない。

出土した遺物は総数六〇点で、各層から出土している。土師器が半数の三〇点を占めるが、接合でさるものが多く、個体数としては少ない。つぎに須恵器の二〇点があるが、小片ばかりで図示する程のものはない。この他には少量

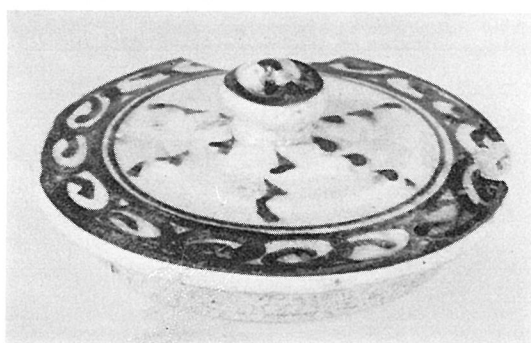


第30図 伏見宮墓地調査箇所的位置 (1/800)

昭和五十六年度伏見宮墓地土塀改修・水道管及び排水管理埋設工事
箇所の調査

伏見宮墓地の土塀が老朽化したので新たにブロック塀に改修することになり、あわせて水道施設の取設、排水溝の設置等整備工事を実施した。工事に際しては昭和五十六年九月一日から翌年三月十九日までの期間中の掘削時に立会調査を行った。

調査は、掘削溝のすべてについて土層の変化や遺構遺物の存否など注意深く観察して行ったが、第30図に示すように随所に実測区を設けて土層図を作成した。



1・2 伏見宮墓地の出土品 3 大聖寺宮墓地の出土品